

「クロスロード」の社会学的分析枠組みの構築

九州大学 三隅一人

1 目的

この報告では、カードゲーム型防災ツールとして広く活用されている「クロスロード」を、板挟みの意思決定が問われる震災インシデント記録として捉え、そこから社会的含意を引き出し、学術的および実践的文脈に差し戻すための分析枠組みを提案する。クロスロードの問題は、実体験にもとづく「正解」のない板挟み状況を示し、一定の立場から二者択一の選択を問う形式となっている。けれども、体験重視のために何と何の板挟み状況かが不明確な問題や、ゲーム後のグループディスカッションの論点を定めにくい問題が少なくない。これらは「成解」模索のコミュニケーションを促す機能をもつ一方、防災学習の観点からは必ずしも効率的ではない。ここにおいて社会学理論に照らしてクロスロード問題の体系的整理をはかることは、クロスロードの災害レガシー的な効用を増すことに貢献する。それだけでなく、板挟みに関わるメカニズムの説明や脆弱性等の背景考察が困難なインシデントを析出することで、災害の観点の内在化を図りながら社会学理論を鍛えなおすことができる。

2 方法

データとして、矢守克也教授らが阪神淡路大震災における聴き取りから作成した「クロスロード神戸編・一般編・市民編・災害ボランティア編」をとりあげる。これらクロスロード問題のひとつひとつを震災インシデント事例として分析対象とする。大枠の分析項目として【タイミング】【場面】【行為主体】【ジレンマ種別】【理論枠組】の5つを設定し、詳細項目を分析的に析出する。理論枠組は、板挟みの状況特性を捉えるべく社会的ジレンマ論を重点的に考慮する。析出された項目に照らしてクロスロード問題の類別化を行う。その際、【理論枠組】に応じた理論準拠問題を作成し、それを標準としてクロスロード問題の事例分析的な掘り下げを行う。

3 結果

以下の詳細項目を析出しつつ、クロスロード問題の類別化を行った。【タイミング】被災時／被災後／復旧／平常時、等【場面】避難行動／避難所／車中泊／物資分配／報道／仕事・就学／居住地／ボランティア、等【行為主体】避難者／子ども（母親）／自治体職員／医療従事者／避難所等管理者／ボランティア、等【ジレンマ種別】障害がある行動／管理対象の排除（公平 vs. 差別化）／公 vs. 私／公 vs. 公、等【理論枠組】公共財問題／囚人のジレンマ／集合行動／社会関係資本／社会的動機、等 また、社会的ジレンマに関わる理論準拠問題を作成した。一例として「あなたは市民。戸建て住宅を購入、新しい土地に移り住んで生活を始めようとしている。さっそく自治会から入会の勧誘がきた。近所づきあいは大事だと思うが、新しい生活でいろいろやりたいことがあるし、自治会の役回りがいろいろくるのは面倒だ。あなたは自治会に入会しますか」。こうした理論準拠問題に照らしてクロスロード問題を事例分析的に掘り起こし、視点を変えることでみえてくる囚人のジレンマや、異なるジレンマが複合的に関わり合っている状況等、表面的には気づきにくい理論的含意を析出した。

4 結論

以上のように、本報告が提案するクロスロード分析項目と理論準拠問題は、クロスロード問題の社会学データとしての価値を引き出し、そこから理論的フィードバックを行うための一貫した枠組みであるとともに、実践的にも社会的視点によるクロスロード類別化に役立つ。